

農村地域における持続可能な景観まちづくりに関する研究
 —(その2) 岐阜県恵那市富田地区の地域認識の継承状況について—
 A Study on the Sustainable System of Regional Landscape
 -(Part 2) About the succession of local recognition of Tomida district -

○川島正嵩¹, 横内憲久², 岡田智秀³, 加藤翔志⁴

*Masataka Kawashima¹, Norihisa Yokouchi², Tomohide Okada³ and Shoji Kato⁴

Abstract: The purpose of this study is to grasp children's local recognition. In this paper, it analyzed by the workshop method. The result is the following; 「①Inside of a daily sphere of activity.」 「②Naming to a scene.」 「③It learned in school.」 and 「④ The scene which has strong relation with myself.」.

1. はじめに—本稿は、第 43 回土木学会土木計画学研究発表会(春大会)において発表した「農村地域における持続可能な景観まちづくりに関する研究」^[1]に続くものである。これまで本研究では、農村地域の持続可能な地域形成に向けた景観まちづくり手法の構築に向け、「農村景観日本一」と称され、現在まで 20 年以上にわたり景観まちづくりを実践している岩村町富田地域(岐阜県恵那市)を対象に、地元住民と筆者らで作成した「風景絵図(Figure 1)*^{1[2]}」の意義とともに、そこでの景観まちづくりの過程から、持続的なまちづくり活動を支える諸要因を捉えてきた。これまでの本研究の取り組みでは、地元の成人を対象にしてきたものがあるが、今後、現状の風景を持続させていくためには、次世代の担い手にこうした活動を託すとともに、その風景価値も継承させていく必要があると考える。そして、こうした風景価値の継承には、原風景形成の時期にあたる小学校高学年の時期^[3]が重要になる。

そこで本研究では、富田地区における世代間を越えた風景価値の共有に向け、地元小学生の風景観を明らかにするとともに、上述した「風景絵図」に対する地元小学生の評価を捉えることを目的とする。

2. 研究方法—小学生は、自身が抱く風景観をうまく表現できないと考え、本研究では、カメラを用い「好ましい風景や場所」を撮影することで、その表現が容易に捉えられる写真投影法^{*2}を用いる。本稿では、この実施に先立って、小学生の撮影テーマを確認することを目的として、集団登校の単位でもある「区」ごとに地元子供会の時間を活用し、ワークショップ形式(以下、WS)で事前調査(Table 1)を実施した。

3. 結果および考察—上述した事前調査の結果を Figure 2 に示す。以降では、これをもとに考察を行う。

(1) 地域認識の分布状況—WS で挙げられた要素は、どの区においても「富田会館」を含む、地元地区の通学

路沿いに多く集中していた。このように通学路を中心に両側 1 km におさまる範囲は、小学生の日常の行動範囲(遊び場)であるとともに、挙げられた地域資源が集中したことを踏まえると、通学路や遊び場は小学生が地域を詳細に記憶する空間のひとつといえよう。

次に、視点場についてであるが、これは「展望台」や「三森山」「岩村ダム」と、日常の行動範囲には含まれない要素が挙げられ、なかでも「展望台」は、全員がそこから眺めた経験があった。「農村景観日本一」についても全員が認知しており、このことを踏まえると、「農村景観日本一」といった風景に対する名付けや「展望台」の設置は、共通の地域認識を育むうえで有用と考える。

(2) 小学校での学習効果—小学校の「総合的な学習の時間」で学んできた、「佐藤一斎」や「岩村城址」「橋本祐三郎首塚」等は、地区を問わず挙げられた。このように、学校教育における地域学習には地域認識を高める効果が何え、地元の地域認識を育み、継承していくうえで的手段として活用できると考えられる。



【風景絵図】
 ・平成 21 年度に恵那市景観計画の検討の一環(景観計画のビジュアル化)として作成を試みたもの
 ・地元住民が当該地域を誇りに思える景観形成を育むうえでの議論のツール
 ・地域の担い手へ、風景・地域に対する価値の継承・共有を行うツールとして、原風景の形成時期である小学校教育への活用を目標に置き、これまでの成果(風景絵図)で議論が出来るのかを検討
 Figure 1. "FUKEI-EZU" and its outline. (This is the original graph by my authors.)

Table 1. Outline of a research. (This is the original graph by my authors.)

事前調査内容(集合形式による空間要素図示法)	
調査日	平成 23 年 7 月 23, 30, 31 日
調査場所	富田会館: 5, 7 区 姥が洞キャンプ場: 6 区 根ノ上キャンプ場: 8 区
対象	富田地域在住の小学校高学年の児童、計 27 名 (5 区: 9 人 6 区: 6 人 7 区: 7 人 8 区: 5 人) → 集団登校や子供会の単位である「区」を基本単位として実施
内容	(質問内容) 「富田・私」にとって「大切な・好きな・新しい友達が出来たら紹介したい場所/もの」の図示 (進め方) 始めに小学校や自宅、通学路、遊び場を探しながら地図を読み込ませ、その後、上記の質問内容を展開した。

1 : 日大理工・院・不動産 2 : 日大理工・教員・建築 3 : 日大理工・教員・交通 4 : 日大理工・学部・交通

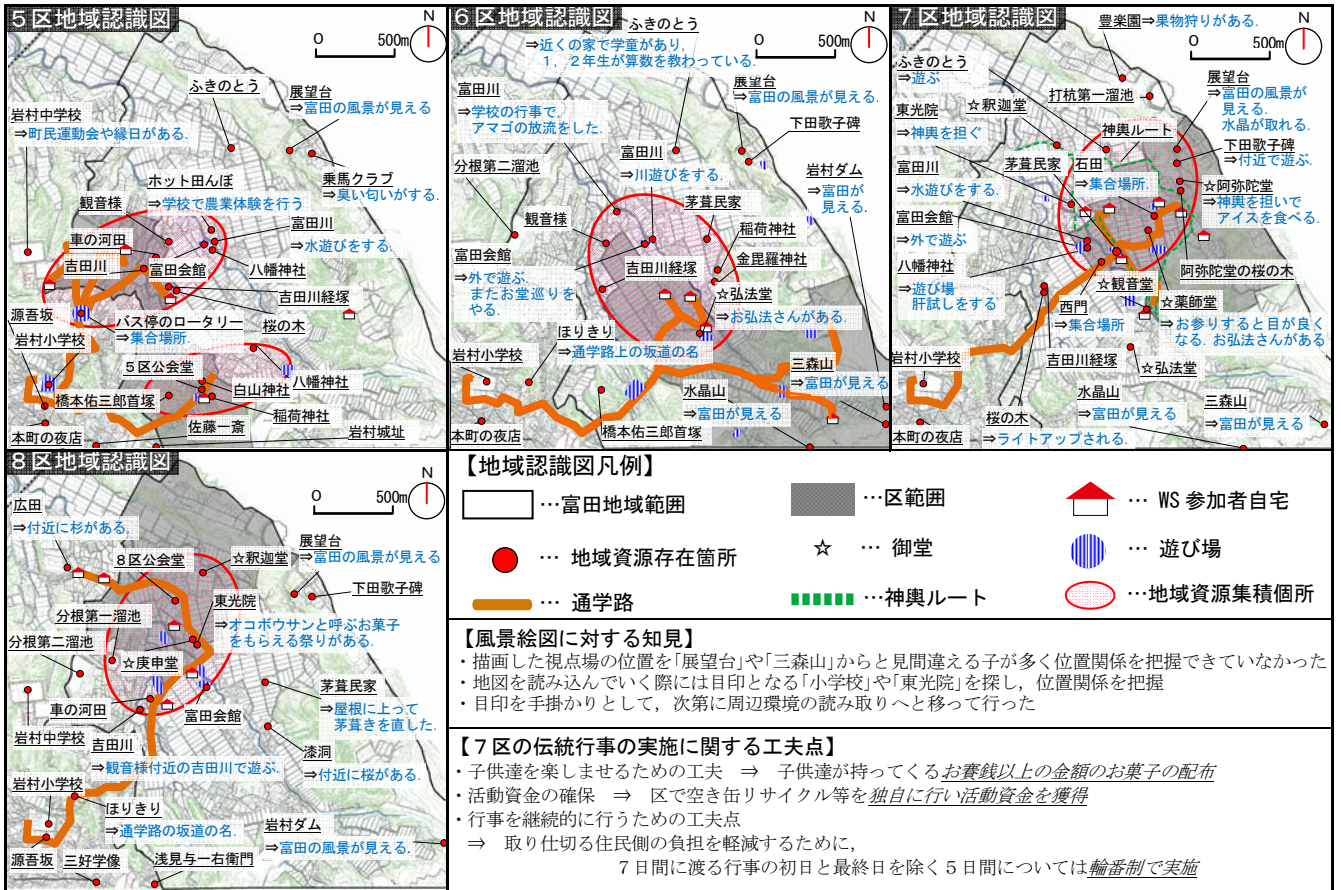


Figure 2. Local resource figures. And the device for continuing a traditional festivities. (This is the original graph by authors.)

一方、「山の講」や「庚申講」の伝統行事を行う場所については言及がなかったものの、「御堂」や「中学校」、「本町」など自分たちが参加する地域イベントである「秋の月待ちお堂巡り」や「ザ・縁日」で使用する場については、地区問わず多く挙げられた (Figure 2)。なかでも「御堂」の出現個数が 5 ヶ所と最も多かった 7 区では、「お弘法さん」と呼ばれる「御堂」を用いた伝統行事に関しても触れられており、7 区ではこうした祭りの取り組み方として、子供をより楽しませる工夫や祭事を取り仕切る住民の負担を軽減し活動の継続を図る工夫を独自に展開していた。

このように小学生の地域認識には、自分達を楽しませてもらえる場所といった、場に対する意味付けを行い認識を強化する傾向にあると考えられる。

(3) 世代間を超えた地域認識—WS で用いた 1/3000 の地形図を提示したところ、小学生は地図を読み込む際に字名を用いらず『〇〇君家がここで〜』や『東光院さんがここで〜』など、友人宅や名所を手掛かりにしていた。筆者らが字名を問いかけ、字名の認知度を尋ねてみたところ、地元地区内の字名すら認知しておらず、これは字名が現在では生活上必要無くなったことで知る機会が失われたためと考えられる。しかし、通学路上にある切通しを「ホリキリ」と呼ぶなど、地区住民全員が共有している通称地名が一部存在していた。

こうした誰もが一度は体験する通学路上の通称地名は字名などからの地域認識の継承・共有が困難となった現在では、それに代わる重要な言語となる。

(4) 「風景絵図」に対する誤認識—「風景絵図」を提示したところ、その描画風景は地域全体で共有している「展望台」や「三森山」からの眺めだとして見間違いが生じ、位置関係を把握できず「風景絵図」による議論が困難な場面に直面した。しかし、次第に「小学校」や「八幡神社」の目印を手掛かりに、「ホリキリ」などの周辺環境を読み取りながら、位置関係を把握していく様子が伺えた。

4. 結論—小学生の風景観に影響を及ぼす範囲は、「日常の行動範囲」とほぼ重なり、その範囲外においては、「学校での学習内容」や「農村景観日本一」などの「名付けられた場所」が関わってくる。さらにこうした認識は、「自分達を楽しませてもらえる場所」といった場に対する意味付けをすることで、強化されることが捉えられた。

また、小学生の「風景絵図」に対する評価としては、地域内に地域全体で共有する視点場を有している際は、その思い込みによりそこからの眺めだと描画風景を見間違えさせる可能性も捉えられた。

4. 補注・参考文献

※1 「風景図」の取組みや作成技法については、参考文献 2 に記載。
 ※2 「写真投影法」は、描画から精神状態を分析する手法を写真に置き換えたものであり、精神医学者である野田正彰が考案した手法である。1990 年頃より、都市計画学の分野で内面の意識を通じて空間を評価する手法として用いられている。文献 4

[1] 馬上和洋ほか 3 名：「農村地域における持続可能な景観まちづくりに関する研究—岩村町富田地区の景観まちづくり過程を通じて—」, 土木計画学研究発表会講演集, Vol. 43, CD-Rom, 2011.
 [2] 佐々木繁, 長谷川智也：「地域景観認識の表現媒体としての絵図—岐阜県恵那市での試みから—」, 景観・デザイン研究講演集, No. 6, pp. 238-244, 2010.12.
 [3] 茂原朋子ほか 2 名：「青年の“原風景”の特性と構造に関する研究」, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 26, pp. 457-462, 1991
 [4] 久陸浩, 嶋海邦頼：「子供と地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み」, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 27, pp. 715-720, 1992